

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02226

研究課題名(和文) 早世者と弔いの宗教文化史的研究

研究課題名(英文) The Religious and Cultural Study of the Young Dead's Funeral

研究代表者

川村 邦光 (kawamura, kunimitsu)

大阪大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：30214696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、弔いをめぐる宗教文化史的研究において、早世者の弔いに焦点を絞ったものであることが特色である。早世者の弔いに関しては、これまで葬法や墓制について歴史民俗学的に調査・研究されてきたが、伝統社会に限られ、近現代に関しては手付かずであった。それに対して1910年代、明治末期頃から、未婚の青年・幼児に対する弔い、遺影や遺品、記念物の制作などの新たな形の弔い法、言わば供養の世俗化が遺族の家庭中心主義的な心情を通じて進展してきたことを明らかにした。それはセンチメンタリズムとモニユメンタリズムの色彩を濃厚にしていくプロセスであり、今日もとりわけ大災害を通じて世界的に広まっているとすることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、『日本民俗文化学講義：民衆の近代とは』、「『ヤキバノカエリ』論 悼みと弔いの形をめぐって」、「亡霊」(大谷栄一他編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』)、「高橋和巳、「わが解体」の途上にて」、「家族写真の系譜とスタイル 家族物語」、「国家物語」、そして「故人史」、「キリシタンの近代」などの単行本や論文、またピーター・ホーマンズ「序文」(P.ホーマンズ編『象徴的な死：世紀の終わりに際する、悲嘆と記憶の曖昧さ』)、ローリング・M・ダンフォース「死の儀礼：ギリシャ北部地方の村にて」の翻訳を公刊し、学術的にも社会的にも意義のある貢献をすることができたと考える。

研究成果の概要(英文)：In the study on the religious and cultural history of funerals, it is the characteristic of this study that is focused on the funeral of the premature death. The study on the funeral of the premature death has already examined and studied on ways of burial rites and constructing tombs in the historical folklore, but it has been limited to traditional societies and has not been studied on modern ages. In this study I explain that funerals of the premature death, new ways of funerals through photographs of the death, articles left by the departed, making of memorials are developed through modern individualistic sentiment of the bereaved from the nineteen-teens. That is the process of strengthening sentimentalism and the new idea of monumentality, which even today worldly spread through great disasters in particular.

研究分野：宗教学

キーワード：早世者 弔い 遺影 未成霊 宗教文化史 宗教学

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、「災厄と弔いをめぐる断想 - 遺影・家族写真と弔いの形」(2012年)と題した論文を発表した。東日本大震災の被災者の家族写真・家庭アルバム、また遺影について述べたものである。ここでは、折口信夫が「民族史観における他界観念」で展開している「未成霊」論に着目している。折口は念仏踊りを事例として取り上げて、寿命をまっとうせず若くして死去せざるをえなかった者の「未成霊」が他界でどのようにして「完成霊」となることができるのかについて考察している。生者と死者の共同の営みを通じて、互いの靈魂を成熟させると論じ、弔いの作法を展開しているのであり、大いに啓発された。東日本大震災後、家族写真・家庭アルバムが大いに注目されたが、いまだ家族写真・家庭アルバム・遺影また早世者と弔いについて論じたものは現われていないために、いまだ研究の余地は多く残されており、この折口の論点に依拠して今後の研究の進展に寄与できると考えた。

2. 研究の目的

早世者の遺族は生前の早世者の遺品を生前のままにしておき、また遺影を飾り、喪失の悲嘆からなかなか立ち直れない。それは当然のことだが、早世者の靈魂を折口の言う「未成霊」と考えてみると、「未成霊」は他界で生き続けていき、何らかのプロセスを経て「完成霊」になると想定することによって、遺族が早世者と連携し、その死を受け入れて立ち直ることもできるかもしれない。この「未成霊」観、また追善供養や鎮魂碑の建立、追悼集の作成などの弔いの作法・作業も研究対象として重要である。このような研究成果を早世者の遺族などに提示することは、実践的な宗教学となり、きわめて大切な意義をもつだろう。そして、成果を単行本にまとめて出版し、幅広く社会に向けて発信していくことによって、学術的にも社会的にも貢献できると考えた。

3. 研究の方法

本研究ではたんに早世者の墓石や遺影、葬式の写真を収集するのではなく、早世者の遺族などと出会って、それにまつわる話をうかがうことに重点を置く。これらの写真を媒介にして、個々人の記憶を喚起してもらい、早世した後、どのように早世者に対応したのか、追善供養などの儀礼、墓碑の建立、遺影や形身への対応、故人の思い出について話していただく。このような聞き取り調査が本研究ではなによりも重視する方法となる。面接する早世者の遺族などは、申請者の親戚や友人・知人であり、また研究協力者の教員や大学院生・留学生に依頼する。新聞・テレビ報道、手記なども用いて、幅広く多様な声を集めていくつもりである。写真や手記の収集に際しては、プラバシーに関わるため、比較的容易に公開の許可をえられる、先にあげた人たちのものを対象とし、所蔵者の許諾をえて、コピーや写真撮影をし、また借用することにする。

4. 研究成果

本研究では、『弔いの文化史 - 日本人の鎮魂の形』(中公新書、2015年)で、弔いや死者儀礼、死霊に関する宗教思想や民俗儀礼、靈魂をめぐる心性の変容について考察した研究成果を踏まえて、『日本民俗文化学講義 民衆の近代とは』(河出書房新社、2018年)を刊行したことを研究成果としてあげることができる。ここでは、やや幅広く宗教民俗に関する文化学を構築をめざしているが、特に弔いや死者儀礼、死霊に関する宗教思想や民俗儀礼、靈魂をめぐる心性の変容について考察した研究成果を単行本として刊行して、社会に向けて幅広く発信できたと考える。本書では、第1に、近代日本における生老病死に対する民俗的・宗教的な作法、また観念・思想の歴史的な変遷を分析して考察した。第2に、そこから派生し広がる生活世界の諸相の変化を幾つかのテーマで考察した。第3に、戦死者に焦点を合わせて、その「未成霊」に関して研究した。重要な論点は忠魂・英霊として靖国神社に祀られた天皇と戦死者の靈との関係、それに戦死者の靈が戦中・戦後に亡霊として出現した多くの

戦死者亡霊譚の意義であり、その分析と考察によって危機的な状況での民衆的な心性を明らかにできたと考える。

他には、「高橋和巳、『わが解体』の途上にて」(『早世者と弔いの宗教文化学的研究：2018年度科研研究成果報告書』)で、高橋が論じた政治運動での早世者、また高橋自身の早世に関して論じた。「『ヤキバノカエリ』論 悼みと弔いの形をめぐって」(『早世者と弔いの宗教文化学的研究：2019年度科研研究成果報告書』)では、画家の熊谷守一の早世した息子と娘の油彩画を考察した。後年に至るまで、画業を通じて、弔いし続けてもなお、弔いが未完だという思いが亡き子の画像を通じて表象されている。

ローリング・M・ダンフォース「死の儀礼：ギリシャ北部地方の村にて」(『早世者と弔いの宗教文化学的研究：2018年度科研研究成果報告書』)、ジュリア・ハーシュ「家族写真：内容・意味・効果」(同前)、ピーター・ホームズ「序文」P.ホームズ編『象徴的な死：世紀の終わりに際する、悲嘆と記憶の曖昧さ』(『早世者と弔いの宗教文化学的研究：2019年度科研研究成果報告書』)などの翻訳を行なったが、後学の資になると考える。以上のように、研究成果を幅広く社会に向けて発信していくことによって、学術的にも社会的にも貢献できたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川村邦光	4. 巻 夏季臨時増刊号
2. 論文標題 高橋和巳、"わが解体"の途上にて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化 / 批評	6. 最初と最後の頁 3-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村邦光	4. 巻 春季臨時増刊号
2. 論文標題 キリシタンの近代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化 / 批評	6. 最初と最後の頁 3-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村邦光	4. 巻 春季臨時増刊号
2. 論文標題 甲いをめぐる語り	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化 / 批評	6. 最初と最後の頁 3-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村邦光	4. 巻 春季臨時増刊号
2. 論文標題 『ヤキバノカエリ』論 - 悼みと甲いの形をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化 / 批評	6. 最初と最後の頁 3-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村邦光	4. 巻 春季臨時増刊号
2. 論文標題 家族写真の系譜とスタイルー “家族物語” と “国家物語”、そして “故人史”	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化 / 批評	6. 最初と最後の頁 155-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川村邦光	4. 発行年 2018年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 267
3. 書名 日本民俗文化学講義－民衆の近代とは	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考